平城宮東方官衙地区の調査（平城第440次）

東方官衙地区とは、第二次大極殿や東区朝堂院が南北にならぶ平城宮中枢部の東側一帯を指します。昨年度の第429次調査で官衙区画の南部分で大きな土坑の一部を検出しました。今回の調査はこの土坑の全容を明らかにすることを目的としました。事前に地中レーダー探査をおこない、土坑の範囲を確認し、その成果にもとづいて255㎡の調査区を設定しました。調査は2008年11月19日より開始し、2009年２月６日に終了しました。

発掘調査では、土坑の全体が明らかになりました。規模は東西約10m、南北約７mの不整形で、深さは約１mです。土坑内からは土器や瓦の破片が出土したほか、地下水に浸された部分には大量の木屑や自然木が層をなしていました。この木屑を含んだ層の木質はほとんど腐っておらず、ほぼ捨てた当時のままで残っていました。また土坑内の埋土や遺物には焦げた痕跡があり、当時、ゴミの量を減らすために火をつけて燃やしたと考えられます。

木屑層には木器や木簡、木簡の削り屑、木材を加工したときの削り屑が大量に含まれているため、すべてを取り上げて室内で丁寧に洗うことにしました。その結果、土ごと取り上げた木屑は2600箱ほどになります。木屑層から出土した木製品では檜扇（ひおうぎ）が多くみられるほか、用途不明の加工品も多数あります。

土坑から出土した木簡は現在200点ほどが明らかになっており、人名を列記したものや、字を練習した習書木簡が目立ちます。重要なところでは宝亀の年号を記したものや衛府、衛士といった役所に関わる文字を書いたものがありました。紀年や役所名はこの土坑の時期や官衙区画の性格を知るための重要な手がかりとなります。しかし、現在明らかになっている木簡はごく一部です。この土坑の時期や性格の判断は今後の木屑層の整理を待ちたいと思います。

また、この場所では土坑が掘られる前後に２棟の掘立柱建物が存在していたことがわかりました。土坑の底から検出された柱穴は東西棟の建物で南北２間、東西５間以上で北側に庇がついた大規模なものです。これは土坑に壊されていることから、土坑より古い時期の建物で、その規模は相当立派なものです。土坑が埋まった後に建てられた建物は東西４間、南北４間の正方形の建物です。規模はそれほど大きくはありません。このように、この場所の機能が時期とともに変化していたことがわかりました。

以上の成果は、東方官衙地区における官衙の構造や性格を把握するだけでなく、官衙のなかの変遷を解明するうえで重要な資料となるでしょう。

（都城発掘調査部　今井　晃樹）

木簡や木屑が大量に出土した土坑（北東から）

木屑層の発掘風景